

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



僕が子どもだった昭和30〜40年代は、寄生虫でお腹を壊すことは珍しくありませんでした。

特に刺身類や生焼けの肉を食べた場合、寄生虫、なかにはサナダムシの卵や幼虫に苦しむ人がいたようです。腹痛や下痢が数日続き、ある日お尻から便とともに突然3〜4匹の物体が出てきた人を知っています。一生忘れられないほどの衝撃でしょ

自らの身体で免疫の研究

う。東京・目黒の寄生虫博物館では、8・8歳のサナダムシ君を見ることが出来ます。

このサナダムシをあえてお腹に飼っていたことで知られた、寄生虫博士こと東京医科歯科大名誉教授の藤田紘一郎さんが5月14日に都内の病院で亡くなりました。享年81。死因は誤嚥性肺炎との発表です。訃報が流れたとき、ある人からこんなことを訊かれました。

「あのトンデモ医者藤田さんは、10年間もサナダムシを飼っていたのに、変な病気にかかるとことなく81歳まで生きられたのはなんですか？」

僕は思わず笑ってしまいました。

「藤田先生はトンデモ医者ではありませんよ。熱帯医学と感染免疫学の素晴らしい研究者で

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

「でも、お腹の中のサナダムシに昔の彼女の名前を付けていたそうですよ。キヨミちゃんて…私、自分の名前をサナダムシにつけられたらショックです」

「ええ話やんか。サナダムシを愛していたんやねえ」

藤田さんはトンデモ医ではないけれど、愛すべき変人ではありません。まあ、医者なんて、ほとんどが

変人ですが。しかし昨今は、エビデンスの乏しい治療を試みたり、国の意向に沿わない発言をするだけでも、「あの医者はけしからん！ 排除せよ！」と叩かれる時代になってしまいました。

僕もコロナについて、メディアで発言をするたび叩かれます。クリニックの窓ガラスを割られもしました。どこが多様性の時代だといふのだろうか？ 人間が自分たちにとって都合の悪いものを徹底的に排除してきた歴史と、コロナというけつたいなウイルスが拡大したことは、決して無関係ではないような気がしてなりません。

面白い著作がたくさんある藤田先生ですが、特に僕は『清潔はビョーキだ』（朝日文庫）という本が好きです。「自然のバランスが崩れると災害が起きるように行き過ぎた清潔志向は免疫力を弱め、感染症などを引き起こす」と警告。

コロナ禍が収束した後も過剰な手洗いや消毒習慣が続いたら、我々の免疫力は確実に落ちるだろう…藤田先生のメッセージを忘れずにいたいです。

213 東京医科歯科大名誉教授 藤田紘一郎

